



たてやま

# おらがんまつち

南総祭礼研究会

2013.12 No.16



## 自慢の山車

「帰らじとかねて思えば梓戸、

なき数に在る名をぞとゞむる」(楠木正行)

歴史の名場面があたかも目の前で演じられていくかのような山車の大幕、その精巧さに息を飲む圧巻な彫刻が山車全体を覆い、そのすべてが一連の物語を紡いでいる。まるで一幅の歴史絵巻を眺めることができる、それが那古地区寺赤組の山車です。

扁額の「建む中興」が示すとおり、中世の名作「太平記」を、彫り物から幕、人形、提灯まで含めた山車全体で表現している大変統一性のある文化財として、二〇〇三年館山市指定有形民俗文化財に指定されています。

彫刻は房州の名工後藤義光、最晩年の遺作にして最高傑作と言っても過言ではない出来栄えで見ると思わずうならせませす。囃子台前柱は、紗綾形の地紋が刻まれた柱に昇り龍下り龍が巻きつく一本彫り、前欄間は「桜井の駅、楠木公父子の別れ」が分厚い材に立体的に彫られています。人形幕各層の四隅には表情豊かなに彫られた仏法の守護神である金剛力士が計十二体も配された

様は壯観で、とりわけ中層は疑宝珠を用いない総彫り物となっており、前方の欄間から続く一連のつながり、バランスが絶妙な彫り物群が、安房地域最高クラスの高さを誇る山車を彩っています。



後藤利兵衛橋義光による彫刻

# 寺赤

## 館山市那古地区

隅には表情豊かなに彫られた仏法の守護神である金剛力士が計十二体も配された

大幕は、楠木正行が辞世の句(冒頭の句)を残す名場面を中心にして、江戸後期の伝統的な刺繍技法によって、立体感や遠近感を感じさせる工夫が随所に散りばめられ写実的な効果を上げています。制作から九十年以上を経た平成十三年には、五十戸以上の町内全世帯からの資金捻出により幕の修復が完成し、担当した美術大学



歴史的価値も大きい大幕

- 地区名 那古地区寺赤
- 神社名 関伽井弁天
- 棟 梁 地元大工
- 彫刻師 初代後藤義光
- 人形 後醍醐天皇
- 扁額 建む中興
- 上幕 ヌ繩、御幣
- 下幕 太平記の場面
- 人形師 不明
- 制作年 明治32年
- 提灯 吉野の桜
- お囃子 馬鹿囃子、砂切、早馬鹿
- 半纏 菊水紋

教授からは「刺繍の伝統的技法や、人物のデザイン独自の個性などは他に類がなく、極めて歴史的価値が高い」と評価を頂き、東京での展示も行われました。寺赤組の山車は、彫刻師をはじめとした名工、職人たちの技術、那古観音前町として栄えた時代の財力、房総の文化が結実した房州山車の傑作として、今後も寺赤町内のみならず地域の貴重な文化遺産として末永く受けつがれていくでしょう。



近後画